

A large, dark, layered rock formation, possibly a fossil or mineral deposit, is shown on a sandy beach. The rock has a distinct, wavy, and textured appearance, suggesting it might be a type of sedimentary rock like shale or sandstone. The background is a light-colored, fine-grained sand.

四 キ リ シ タ ン 史 跡 案 内

北陸地方のキリシタン史跡案内

5 殉教した越前・若狭・越中出身者たち

一 一六一九年（元和五年九月）、京都の牢の中で若狭の年老いた医師ヨハネ仙斉が殉教。

二 一六二四年（元和十）二月、カルヴァリヨ神父と八名の信者が、仙台の広瀬川畔の大橋の下に設けられた刑場で水漬で殉教。その中に越前のマチャス小山庄太夫がいた。

三 一六二四年（寛永元年七月二十六日）、秋田の久保田で多数の信者と共に、越前のドミンゴ九兵衛、リアン五郎右衛門が斬首により殉教。

四 一六四三年（寛永二十年十二月）、福井藩の中から医師田代養仙、無請三竹（奥田家祖）がキリシタンとして



カトリック金沢教会

訴えられ、江戸へ送られたが、無請三竹は江戸で間もな

く病死し、殉教。田代養仙は許され福井へ帰った。

五 一六九四年（元禄七年七月）、松岡藩主松平昌勝が福井藩主松平兵部

大輔（昌親）に宛てて、賀浦十兵衛、八兵衛がキリシタンとして露

したので、幕府からの命令により、北条房州（安房守）と深田若州（若

狭守）の両役所に渡さねばならなくなった。先ずそちらに送るから、

万事よろしくという文面の書状を送った。その書状は現在消失してい

る（福井県「丹生郡誌」、「河野村誌」）。

福井教会信者の吉川侠治は、「元禄七年（一六九四）、賀浦十兵衛、

八兵衛がキリシタンとして捕えられて来たのを、藩士の松原郷左衛

門、前波、中根らが江戸送りするため警固したとある。その後の記録

はなく、赦免された話もないから、多分江戸で殉教したのではなから

うか」と述べている（「カトリック福井教会五〇周年記念誌」）。

六 続けて吉川は「元禄の頃、本南條郡河野村糠浦の百姓組頭の太郎右衛

門がキリシタの疑いで訴えられた。詮議の手段に踏み絵を行ったが、

キリスト像のかわりに阿弥陀仏の画像を床に置いて、疑いのある者

たちにその上を歩くと命令した。仏教信者、特に真宗門徒の多いこの地方の者は、仏罰を恐れて画像を踏まずに避けて通ったが、ただ一人太郎右衛門だけが平気でその上を歩いた。彼がもはやキリシタンであることは間違いなかった。太郎右衛門は江戸送りにされ、さらに吟味の上に棄教しなかったので、ついに火刑に処せられた。同郷の者が哀れんで遺骨や灰をもらい受けて帰り、糠浦のはずれに流れる川の三角州のような小島に葬った。『この地に変動あらば我が魂ここにどまらと思え』と、江戸送りになる前に太郎右衛門が言った由で、それから風の強い夜中にはこの辺がゴーツと異様な音がするので『太郎右衛門島』と人々が呼ぶようになった」と述べる。これは福井県にただ一つある殉教の伝説である（資料18）。

6 福井県のキリシタン史跡

「太郎右衛門島」跡



糠川の太郎右衛門島遺跡

所在地 福井県南條郡河野村糠浦 〈地図35〉

「この地に変動あらば我が魂ここにとどまらと思え」と、太郎右衛門が江戸送りになる前に言ったとかで、それから毎日夜半にはこの辺りがゴーツと異様な音を発するので、「太郎右衛門島」と人々が呼ぶようになったという。福井県にただ一つある殉教の伝説である。

現在は河川工事で周辺の地形は大きく変えられたが、三角洲は現在も残っている。

7 金沢のクリシタン史跡

南坊石（金沢教会敷地内）

所在地 金沢市広坂一丁目一の五十四 金沢教会敷地内
交通 北鉄バス「香林坊」下車 〈地図37〉



高山右近像 カトリック金沢教会創立百周年記念事業の一つとして、1988年4月10日建立された。

金沢教会の片隅に「南坊石」と呼ばれる質の良い戸室石の庭石がひっそりと置かれている。前田利家が一五八八年（天正十六）ごろ、高山右近の住まいとして与えた邸内（21世紀美術館敷地内）に置かれていたと言われ、その後、幾度か人手を経て、加賀藩家老本多安房守の上屋敷の庭園にあったのを、一九四八年（昭和二十三）四月に「高山右近顕彰会」の請いによって、本多氏より教会に寄付されたものである。

第一の高山右近屋敷跡（現在の金沢21世紀美術館）

所在地 金沢市広坂一の二の一 現・金沢21世紀美術館敷地

交通 北鉄バス「広坂」下車 〈地図46〉

教会を出て兼六園に向かって歩き、金沢市役所隣、ここが右近の屋敷跡と言われている。『金沢古蹟志』には「高山南坊の第跡は石浦神社の向、旧藩中は岡田氏等の邸地となり、今師範学校の囲い内となったり。」と明記されており、利家生存のころの右近の屋敷だったところである。



第一の高山右近屋敷跡



金沢教会敷地内にある「南坊石」

西内惣構跡（尾山神社前）

所在地 金沢市尾山町十一の一

交通 北鉄バス「香林坊」下車 〈地図47〉

尾山神社の鳥居前にあり、案内掲示板に由来が詳しく紹介されている。水路用壁や暗渠フタの石造遺物は見事なもので、現在も清流が見られる。右近が構築した「内惣構」の西内惣構は、この辺りを起点としており、旧上松原町から近江町、彦三、主計町を通り浅野川に通じていた。

第二の高山右近屋敷跡（文教会館隣 ポスト前）

所在地 金沢市尾山町十の二

交通 北鉄バス「南町」下車 〈地図48〉

尾山神社の北側に「金沢貯金事務センター」がある。「金沢古蹟志」によると、右近の第二の屋敷跡は旧金谷館前の土地になっているが、現在の



西内惣構跡と案内看板



西内惣構跡
（尾山神社鳥居まえ）

「金沢貯金事務センター」が立てられている土地がそれである。右近が石浦神社前の第一の屋敷から、この第二の屋敷に移ったのは一六〇二年（慶長七年十二月）の金沢城炎上前後のこととされている。

教会跡・キリシタン武士らの住居跡（甚右衛門坂下）

所在地 金沢市尾山町七の三 現・大谷廟所

交通 北鉄バス「南町」下車 〈地図49〉

尾崎神社の横に、甚右衛門坂と記された石碑が見える。この石碑の側面には次の通り記されている。

「天正八年（一五八〇）佐久間盛政の攻撃を受けたとき、本願寺方の浪士平野甚右エ門が奮戦討死にした坂なのでこの名がついた。『金沢古蹟志』に「この頃、金沢甚右衛門坂の下にばてれん居たり」とあり、現在の大谷廟所のあるあたりに教会が建てられたと言われている。甚右衛門坂は金沢城の内惣構橋詰めに上がる横道であり、非常の際には重要な出入口となる坂道である。その坂下に教会の建立を許したのであるから、慶長六、七年



キリシタン武士らの住居跡



第二の高山右近屋敷跡
金沢貯金事務センター敷地

頃の利長は、右近並びにキリシタンに対して特別な信頼を抱いていたと思われる。内藤徳庵、宇喜多久閑らの高禄キリシタン武士たちも、次々とこの教会の付近一帯に屋敷を与えられるようになった。古老によると、内藤徳庵の末裔の家が、明治の初めまで、この付近にあったそうである。

大手門跡（大手堀）

所在地 金沢市大手町二の二六

交通 北鉄バス「公園下」下車 〈地図50〉

兼六園下から石川門下の「白鳥路」を通って大手町の堀に出ると、「大手町」と刻まれた石碑がある。その側面には次の通り記されている。

「藩政時代は金沢城の大手町であったのでこの名がついた。大手先、小坂口とも呼ばれ大身の武士が住んでいた。」

一五九九年（慶長四）、増田長盛らの中傷で、家康から利長謀反の疑いをかけられ、家康が加賀征討の軍を起こそうとしたとき、利長は右近と家老横山長知らを大阪に派遣し、意図なきことの弁明と、利長の母「芳春院」



大手門跡



「甚右衛門坂下」石碑

を人質として江戸に下らすことで、加賀藩の危機を脱した。これが、大名の家族を幕府に人質として差し出す最初のケースとなった。

さて、利長は加賀藩の不安はそれだけで解消するものでないとして、右近に金沢城の修築を命じた。右近は高槻城築城の経験を生かして、一五九九年（慶長四年十二月から翌年正月にかけ）、わずか二十七日間で新丸を築造、尾坂門を大手の正門にするという大事業をなし遂げた。

「大手門」の石碑があるところは、この「大手門」の跡である。

南蛮寺跡（公園下バス停）

所在地 金沢市兼六元町

交通 北鉄バス「公園下」下車 〈地図51〉

宇喜多秀家の室であつた利長の妹、豪姫は、関ヶ原の役で宇喜多家が没落した後、北政所に仕えていた。受洗して一六〇七年（慶長十二）頃金沢に来た。それに伴い、キリシタンである宇喜多久閑も金沢に来て知行一千五百石を受けた利長は彼らのために紺屋坂に南蛮寺を新たに造らせた。



南蛮寺跡



大手門跡にある案内木札

脇田直賢邸跡・キリシタン灯籠（玉泉園）

所在地 金沢市小將町八の三

交通 北鉄バス「公園下」下車 〈地図52〉

紺屋坂を下り、「県兼六駐車場」を左折すると、「加賀友禅伝統産業会館」横に「玉泉園灑雪亭露地」と書かれている石碑のある庭園がある。

「玉泉園」の由来は、パンフレットに次のように記されている。

「宇喜多秀家が朝鮮遠征の際、金如鉄と称する少年を岡山城へ連れ帰った。その後、秀家の没落により、秀家夫人豪姫はこの少年を伴って金沢に里帰りした。この少年は初代藩主利家夫人芳春院と二代藩主利長夫人玉泉院に育てられ、後に帰化して脇田直賢と名乗った。この庭園は直賢が作庭にとりかかり、脇田家四代目久兵衛の時完成した。この玉泉園の名称は二代藩主利長夫人玉泉院に由来し、代々脇田家が所有していたが、明治の代に西田家の所有となり、現在は一般に公開されている」とある。

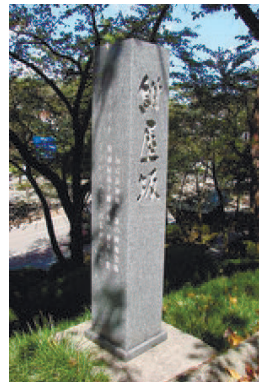
庭園にはキリシタン灯籠がある。キリシタンであった脇田直賢が青戸室石で作らせたもので、織部型である。



玉泉園正面



「玉泉園灑雪亭露地」碑文



「紺屋坂」碑

東内惣構（小将町中学側）

所在地 金沢市小将町一の十五

交通 北鉄バス「公園下」下車 〈地図53〉

小将町中学の脇に、「旧東内惣構堀」と記されている石碑が見える。碑の側面には次の通り書かれている。

「金沢城防備のため二代藩主利長が慶長四年に高山右近に命じて掘らせた東側の内堀である。旧小尻谷町から始まり橋場町を経て浅野川まで長さ約一千三百メートル、幅九十センチメートルから三メートル六十センチで、城側に土居を盛り竹藪を配していたが、今その面影は殆どない。」

一五九九年（慶長四）右近の指図により僅か二十七日間で「内惣構堀」が完成したと言われ、全長は東と西を合わせ三キロメートルである。

西内惣構出口（主計（かぞえ）町 緑水苑）

所在地 金沢市尾張町二の十六



東内惣構（小将町中学北側）



兼六公園入口の紺屋坂付近の案内図

交通 北鉄バス・ＪＲバス「橋場町」下車

〈地図54〉

尾山神社近くを出発点とする西内惣構が浅野川に流れ込む最終地点。高山右近が造った当時の惣構の一部を復元した。詳しい説明板あり。この金沢城惣構跡は平成二十年十二月金沢市指定史跡になった。

金沢傳燈寺

所在地 金沢市伝燈寺町ハ一七九

交通 国道一五九号線 鳴和交差点を富山方面に右折、

県道に入り車で約十分。

西日本ＪＲバス「小二又」行「傳燈寺」下車〈地図39〉

勅願寺の格式を持ち、運良開山以来、歴史的由緒ある傳燈寺は、一六五四年（承応三）加賀藩主前田利常の信頼を受けた少林寺千岳によっ



金沢の「傳燈寺」



案内看板



西内惣構出口（主計町緑水苑）

て、妙心寺派として再興された。キリシタンであつたといわれる加賀藩家老津田玄蕃の父、津田正勝の位牌や墓塔と伝えられている五輪塔がある。本堂裏山に、十字架の形をした洞窟があり、地元では「弁天穴」と呼び、信仰（仏教）の場所として崇められているようである。

魚津の座頭沢市と妻の処刑地

所在地 金沢市泉野町三丁目十五番地十四号

現・泉野桜木神社辺り

交通 北鉄バス 光が丘行き「泉野三丁目」バス停車

〈地図41〉

『越中魚津のキリシタン塚』に記載されている加賀藩唯一のキリシタン殉教事件である、鈴木孫佐衛門とその家族等七名の処刑とほぼ同じ時期に金沢で処刑された人たちについて記す。

加賀藩の禁教政策は、寛永期の一六二四～一六四四年を通して厳しさを増していった。『三州奇談』及び『三壺聞書』によれば、一六三〇年（寛永七）



金沢の元処刑場跡
(泉野桜木神社)
沢市夫妻殉教地

に、高山右近の法弟の加賀藩士鈴木孫左衛門（知行千石）が江戸城詰として出府中に領内では宗門改めがあつた。孫左衛門は内心信仰を維持しているとの訴人が出たために江戸で捕えられ、江戸神田川のほとりで処刑され、魚津（現在の富山県魚津市）在住の孫左衛門の家族は魚津で処刑された。金沢では孫左衛門と懇意の沢市という座頭夫妻とその他十名ほどのキリシタンが捕えられ、沢市夫妻は金沢の泉野で磔刑、他の者は斬首、獄門に処せられたという。この事件は加賀藩領内での唯一の殉教事件であり、沢市夫妻が処刑された「泉野」は、藩制時代「泉野新村」と呼ばれた広大な孟宗竹の竹林に囲まれた所で、『金沢古蹟志』によると、一六〇七年（慶長十二）頃、藩の刑場が現在の泉野町三丁目から泉村（泉野新村）の村地へ移つたとあり、その中心は泉野桜木神社辺りであつた（資料21・22）。

卯辰山の浦上キリシタン流配史跡 案内地図 (金沢市卯辰山概略図)



浦上キリシタン収容場所と
埋葬骨群発見現場

- ① 織屋 ② 養生所
- ③ 長崎キリシタン殉教者碑
- ④ 湯坐屋 ⑤ 奥のトキエ
- ⑥ 埋葬骨発見現場

卯辰山の浦上キリシタン流配史跡

所在地 金沢市金沢市末広町

交通 JR金沢駅から北陸鉄道バス九〇系統「卯辰山行き」

で二十一分〈地図55〉

① 織屋跡

浅野川に架る天神橋を渡り、卯辰山の坂道を約七百メートル程登ると、右手に「花菖蒲園」がある。

十四代加賀藩主前田慶寧が一八六七年（慶応三）卯辰山を開拓したとき、ここに卯辰山生産の糸を以て、種々の織物を、婦女子に織らせる織物を、この場所に建てたが一八六九年（明治二）の藩籍奉還により開拓は中止となり、当時は空家になっていた。その建物は、十五間に二間半の二階造りの長屋であった。

ここに到着したのは、主に戸主で大阪経由の百十三名（途中一人脱走）であった。彼らが金沢に着いたのは、一八六九年（明治二年十二月二十六日）であった。



織屋跡

② 養生所跡

織屋跡を後にして、道路蛇行して前進する。織屋跡の丁度崖上あたりの道路の左手民家の庭先に養生所の説明を記した立札がある。

養生所は、一八六七年（慶応三年六月）から始まった卯辰山開拓のメイン施設として建てられた病院であつたが、移転して当時は空屋になつてゐた。

一八七二年（明治五年六月）に卯辰山の養生所跡に入れられた人々は、大聖寺に流配された人々だった。

長崎・浦上キリシタンの八十三名は瀬戸内海、大阪を経由して大聖寺の「庄兵衛谷」の「射的場」の長屋に到着。一八七〇年（明治三）一月十二日の到着だった。その後、三十三名が富山へ二月二十一日に移動。残った婦女子と小児ばかりの四十五人（他に五人死去）が各寺院に数人ずつ預けられた。その後、金沢・卯辰山の養生所へ連れてこられたのだった。

③ 長崎殉教者之碑（キリスト教殉教者の碑）



養生所案内立札



養生所跡

養生所跡を後に、さらに坂道を登ると、高台にある左手「望湖台」に着く。右手に「横空台」という駐車スペースがあり、その手前に「長崎殉教者之碑」と書かれた木製の標識がある。それに沿って下ると「長崎キリシタン殉教者碑」が建っている。

一九六八年（昭和四十三）八月十一日、カトリック金沢教会が創立八十周年記念事業の一つとして建てたものである。

正面の題字は次の通りである。

「義のため迫害される人は幸いである マテオ 第五章十節より」

（この碑の建てられている場所は、浦上キリシタンが収容された跡ではない）

④ 湯坐屋跡

「長崎殉教者之碑」から「望湖台」へ折り返した左手道路の突き当たりに、「見晴台」の標識を右手に見ながら、相撲場方向へ進む。左手にあるユー・スホステル、バス停を後にして、「トイレ」「花木園」と「グランドゴルフ場」の標識の間の左側道路を下っていくと、平地にたどりつく。道路奥まった



長崎殉教者之碑

ところ左手に、四メートル程の碑が見える。「興川貞次郎紀功之碑」と刻まれている。その碑の左手の石置き場になっているところが、「湯坐屋」跡。建物は方形二階建て。畳数はおよそ五百畳程、部屋数も四十七間ほど。四方に柵が設けてあった。

第二陣の長崎↓七尾↓金沢の家族四百十一名が、十二月二十一～二十三日に到着した。第一陣より、第二陣が金沢には数日早く到着したのであった。「湯坐屋」といっても、かつての「城が谷薬湯」としての湯治客の賑わいのおもかげはなく、湯も枯れてしまっていたところに収容された。

⑤ 奥のときえ

「湯坐屋」を後にして「花木園」の標識のある本道に戻り、「卯辰山相撲場」を左手にして前進すると、道路標識「↑鈴見台」「←御所東長江」が前方に見える。

そこを通過して、三叉路の左側谷底が、木が生い茂っている、「あざみ谷」と呼ばれている一帯で、この谷底の一角に当時「奥のときえ」があった。「湯坐屋」から約八百メートルの地である。



奥のときえ
（「ときえ」は方言で「徒刑」と云われる）



湯座屋跡
（「興川貞次郎紀功之碑」
左側の石置き場）

この「あざみ谷」の一角、東長江地内の谷底に十六間に四間のわらぶきの牢屋が置かれ、二重柵が巡らされていた。信仰の強固なものをここに収容し、改宗を迫ったのである。

⑥ 埋葬骨発見現場

「奥のときえ」から約三・三キロメートル。「奥のときえ」を左手に見て、道路を東長江方面へ蛇行しながら前進していく。突きあたりの川のそばに標識がある。左側の「御所町」方向へ向かう。途中右手のにぎやかな御所ニュータウン口の道路に向かわずにそのまま直進。「高田バス停」のすぐそばの住宅団地内の左手道路に入る。前進十メートル位の右手の農道に入っていく。卯辰山トンネル（東長江口）の本道でなく真横の脇道に出ることになる。この脇道で、卯辰山トンネルの入口脇に車を止めることができる。（外環状線に入ってしまうと、トンネルの入口で、車を一時停止できないので注意）

卯辰山トンネル（東長江口）の右手のけずりとられた崖斜面の竹林と竹林の間の上部あたりから四十体の遺骨が出てきた。



埋葬骨発見現場
卯辰山トンネル（東長江口）右手斜面

人骨発見の様子は以下であった。

一九九八年十月中旬、金沢東部環状道路（国道八号バイパス）建設にもなう卯辰トンネル北口の西北斜面工事の際、その山腹（金沢市御所町地内、通称「長嶺」）の七メートル四方から墓穴十三ヶ所、土葬人骨四十体が出土した。（人骨は現在、国立科学博物館に保存されている。）

木棺をとめた釘の形状から江戸末期から明治初期にかけてのものであると推定された。

その後、森山誠一氏の卯辰山への徹底した調査の功あつて、発見された人骨は浦上キリシタンであることがより明らかになった。

8 能登のキリシタン史跡

高山右近子孫伝承の伝わる里、能登の志賀町

所在地 石川県羽咋郡志賀町末吉



埋骨発見現場

卯辰山トンネル（東長江口）右手斜面

交通 北鉄バス門前急行 金沢駅東口発「末吉」まで

一時間二十分 〈地図56〉

イエズス会の報告のなか、高山右近が「知行の大部分を得ている能登国」と記されている加賀藩の史料に右近が志賀町大坂村に来たことや、配下の百姓数名の名前が連記された文書がある。これら、複数資料により、志賀町も右近の知行の一つと思われる。今に伝わる右近子孫伝承では、志賀町末吉の隣村高浜の海からやってきたという子孫が一時期家来、板尾ジンザと共に末吉村に住んだという。また、高山右近の娘ルチャや孫のフランシスコがマニラから日本に帰ったと一六一六年七月一八日付、長崎発信の書簡が外国人宣教師から発信された記録がある。子孫の菩提寺西来寺の住職が、右近の屋敷跡や墓跡の場所の伝承者である。末吉の川のそばに高槻の右近像と同じ像がある。

本行寺（本門法華宗）

所在地 七尾市小島町リ一三四

交通 JR七尾線〔七尾〕下車

北鉄バス「小島橋」下車 徒歩十分〔地図40〕

一六一四年（慶長十九）二月、高山右近らのマニラ追放後、加賀藩の高級武士のキリシタンの夫人たち、すなわち、津田玄蕃の海津夫人、長好連の夫人（前田利家の娘福姫）だった松寿院とその娘菊たち、二十数名が密かに本行寺に送られて、一代蟄居を命ぜられたと伝えられている。

寺の敷地内には下寺屋敷跡（高山右近の修道所といわれている）や「右近の井戸」跡があり、能登に知行地のあった高山右近と深い関わりのある寺と言える。

一九九六年（平成八）に、寺で発見された「靈宝目録（年代不詳）」に、長房公長刀（長房公とは高山右近のこと）、混天儀（渾天儀・天体観測器機）、音楽器（舶来の楽器と考えられる）等の記載があり、本行寺と右近およびキリシタン達との係り合いを考える上で興味深い。

菊姫の枕仏と伝えられている漆塗りの厨子が保管されているが、中には



本行寺の「右近の井戸跡」



七尾市の「本行寺」

彩色した座像が安置されており、胸のところを開くと、奥に十字架が隠れてあり、幽閉後も密かに信仰を守っていたのであろう。

9 富山県のキリシタン史跡

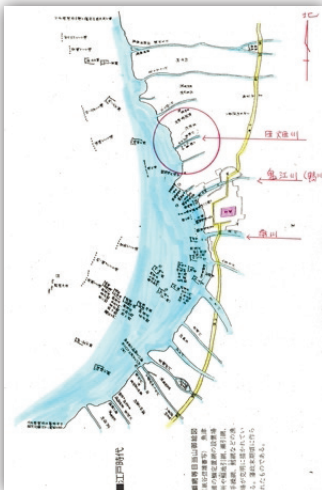
キリシタン鈴木孫左衛門とその家族の塚跡

所在地 富山県魚津市本新町七五一

富山県魚津市釈迦堂八一四番

魚津埋蔵林博物館敷地付近 〈地図45〉

加賀藩で記されている唯一のキリシタン殉教事件である鈴木孫左衛門とその家族等七人の殉教。処刑後埋葬されたと伝えられる塚跡は「ユティティカラ」の塚と呼ばれていた。



魚津殉教地
(現日本カーバイド工場敷地)

魚津殉教地「田畑川」を期した古絵図

魚津市の歴史民族博物館に隣接する「吉田記念郷土館」によれば、魚津の古絵図を調査した魚津在住の紙谷信雄の『魚津古今記・永鑑等史料』の中に古絵図「鰯網等目当山御絵図浦役所」があり、図の中に「田畑川」の名が記されている。現在の場所は明治以降の近代化により工場建設敷地となり、また魚津港拡張や河川改修工事により、さらに最近「魚津埋没林博物館」の建設のために塚跡は海中に没している。

富山藩の浦上キリシタン流配史跡

キリシタンきく塚

所在地：富山市婦中町長沢鏡坂（長沢西光寺から徒歩約十五分）

交通 徒歩 長沢西光寺から富山方向に進み、長沢バス停を左折し、古沢郵便局、NTT通信所（高い鉄塔を右折すると、「きく塚」の案内板があり、山中に入る。



紙谷信雄『魚津古今記永鑑等史料』

車（富山市から）国道四一号線から国道三六九号線

に入り、長沢西（信号）交差点を左折し、最初の交差点（信号なし）を右折し古里郵便局、N T T通信所を右折すると、「きく塚」の案内があり、徒歩で山中に入る。〈地図42・43〉

長沢山の鏡坂のほitoriにある地藏堂は、難産のため死去した「きく」の霊を慰めるために村人が建てたもので、地元の古老は「きく女の墓」と呼んでいる。その後、地藏堂の老朽化により一九七九年（昭和五十四）改築の折に、カトリック富山教会がマリア像を地藏尊像の隣に安置してもらった。なお、鏡坂は重次郎が人目を忍んで通ったことから、土地の人は「重次郎坂（重坂）」と呼んでいる（資料22）。

長沢西光寺

所在地 富山市婦中町長沢三九三三

交通 電車 高山線千里駅（無人駅）下車徒歩二キロメートル



長沢山の鏡坂の道脇に立つ地藏堂



「長沢西光寺流罪キリシタン
きくの墓」案内看板

トル。又は、速星駅下車、約五キロメートル、バス、タクシー利用可。

車
（富山市から） 国道四一号線から国道三六九号線に入り、長沢交差点（信号・角に稲荷神社）を左折し、長沢バス停を過ぎると右側に長沢西光寺がある。〈地図42・43〉

重次郎の妊娠中の妻きくと四才になる娘とめは、長沢西光寺に幽閉されたが、住職らの手厚い介護の甲斐もなく、難産で出産後すぐに母子ともに死去した。

合寺令により浦上キリシタンの収容先が藩家老鈴木邸に移転

所在地 富山市山王町四の四九 カトリック愛護幼稚園

〈地図44〉

一八七〇年（明治三年十月二十七日）富山藩は突然、合寺令を出し、一



浦上キリシタン流配地跡
藩家老鈴木邸跡（現在の愛護幼稚園）



長沢西光寺
富山市婦中町長沢

宗一寺を建前として、他の寺院をすべて取り壊すことにした。この合寺令により、二十九の真宗の寺に預けられていた浦上キリシタンは、一八七一年（明治四年五月）、山王町の家老・鈴木邸に移された。そして、横にある日枝神社の神主より、一か月程神道の講義を聴かされた。瀬川安信によれば、「仏教に転宗した浦上の信徒たち頭の重次郎など転宗者三十七名は、もとのキリシタンに立ち返りたいと正式に願い出て、これが認められて、彼らは「立ち返り信徒」として帰郷した。」（「富山藩預けの浦上キリシタン」『キリシタン文化研究会会報』21）。

牢の跡地には現在、カトリック富山教会の愛護幼稚園が建てられ、かつて浦上キリシタンが、自炊や洗濯に使ったと思われる井戸は、幼稚園舎の下に埋もれている。一九一四年（大正三）三月、神言会のヘルマン神父は、富山教会信者正谷の世話で、この家老・鈴木家の屋敷跡を購入し、聖堂を建立し、後にフランシスコ会に委託。これが現在の富山教会である。

二〇一一年（平成二十三）八月二十八日、この地に「浦上キリシタン流配の地」記念の表示が建てられた。



富山藩家老鈴木邸跡
（現在のカトリック富山教会）